

寝ても覚めても恋の罨!?

プロローグ 今になって思うこと

——十代までの私は、お人形みたいなお嬢様だった。
花宮鈴香は、自分の過去をそう思い返す。

明治時代創業の大手製造機器メーカーであるハナミヤ産業。その創業家の一人娘として生まれた鈴香は、衣食住はもちろん休日のお過ごし方や進路まで、彼女の幸せを願う両親に決められていた。

鈴香の許嫁だった伊ノ瀬雅洗も、そんな両親が彼女のために用意した幸せへの布石の一つだった。普通に考えれば、進路も結婚も全て親任せなんておかしな話なのだろう。

だが幸せを与えてもらうことに慣れていた鈴香は、漠然とした不安を感じても、その理由をちゃんと理解できずにいた。

そして、鈴香の十代最後の夏。彼女の父が経営するハナミヤ産業が倒産した時、それがどれだけ危険なことだったか思い知った。

それから五年が経過し、誰かに依存することなく自立した生活を送れるようになった今、あの頃の自分がどれだけ空っぽでなんの魅力もない人間だったかがわかる。

——そんな私と結婚しても、雅洗さんは幸せになれなかったと思う。

もちろん鈴香だって、愛のない結婚なんてごめんだ。

そう思ったからこそ、雅洸との婚約解消を決意した。

決意した……はずなのに、なんでこんなことになっているのか、鈴香には理解できずにいる。

——雅洸さん、私との結婚に、そんなにムキにならなくてもいいと思うんですけど……

生まれも育ちも申し分のない彼が、鈴香との結婚にこだわる意味が分からないまま、今日も彼からのアプローチに振り回されるのだった。

1 あの日

あれは、鈴香が短大二年生だった、ある夏の日。海外赴任から一時帰国した雅洸が彼女を連れていったのは、郊外にあるイタリアンレストランだった。

夏休み中のせいとか、昼下がりの店内には若者が多く、たわいないお喋りで賑わっている。

そんな店内を見回した鈴香は、ウェイターに料理と飲み物を注文する雅洸へと視線を向けた。

切れ長の目で奥二重の雅洸は、鼻梁が高く彫りの深い顔立ちをしている。きりりとしたまっすぐな眉と、真一文字に結ばれた薄い唇が、自信家で意志が強い彼の内面を物語っているようだ。

顔立ちを整っているが、世間一般で言うイケメンのくくりに入れるには個性が強い。雅洸は、オリジナルの美しさにあふれている。

そんな彼とは、鈴香が幼稚園の頃、両家の親同士が婚約を決めてからの付き合いだ。

六つ年上の雅洸は社会人として忙しく働いているので、年に数回、たまの休みに合わせてデートするのがここ数年の二人の習慣になっている。

向かいに座る雅洸と、ふと視線が合った。

「可愛くしているね」

そうやって、雅洸が爽やかに微笑んだ。

今日の鈴香は髪をアップにし、白地に淡いブルーの小花があしらわれたワンピースを着ている。

雅洸に釣り合うよう、大人びた雰囲気にしてほしいと、プロのヘアメイクを頼んだのだ。

それなのに雅洸は、鈴香のアップヘアに視線を向け、「でも髪型はまだまだ子供だ」と、付け加えた。

——そうやってすぐ子供扱いするんだからっ！

そんな不満が顔に出てしまっていたのか、雅洸が「拗ねてる？」と、からかうように聞いてくる。

「え？」

「俺が大事な婚約者様を、いつもほったらかしにしてるから」

「それは仕方ないです。雅洸さんは、学生の私と違って忙しいから」

雅洸は、日本を代表する電機メーカーI N Sの創業者一族の御曹司で、将来重職につくことが約束されている。父親はI N Sの系列会社の社長を務めているが、雅洸自身はI N S本社に籍を置き、今はアメリカ支社に赴任中だ。

本社の副社長は雅洸の伯父にあたる伊ノ瀬豊寿が務めており、いずれは社長になると噂されている。彼には子供がおらず、雅洸を実の息子のように可愛がっていた。もし豊寿が社長になれば、将来的には雅洸がINSの社長に就任する可能性も高い。

そんな背景もあり、仕事に忙殺されている雅洸。彼が遊んでくれないからといって、鈴香が拗ねたりワガママを言ったりしていいわけがない。

「子供の頃みたいにしよっちゅう遊んであげられなくて、悪いとは思っているよ。学生の夏休みは長いから、退屈だろ？」

「しよっちゅう遊んだって……、いつの話をしてるんですか」

確かに子供の頃は、頻繁に互いの家を行き来していた。夏休みなどの長期休暇には、どちらかが相手の別荘に泊まりがけで遊びに行くこともしばしばあった。でも、それも雅洸が小学校を卒業するまでのことであり、十年以上前の話だ。

「ごめん。さすがに鈴香も、そこまで子供じゃないよな」

そう笑って、雅洸は運ばれてきた水を口に運ぶ。

「……」

鈴香も、自分の前に置かれたグラスに口を付けた。

もうじき二十歳になるのだから、いつまでも子供扱いしないでほしい。

鈴香としてはそれなりに成長したつもりなのだが、雅洸はいまだに幼い妹の遊び相手でもするかのような態度で接してくる。

その穏やかで優しすぎる扱い方が、鈴香としては面白くない。

——こんな距離感のまま、結婚して大丈夫かな？

このままでは、保護者が父親から雅洸に変わるだけで、自分は一生子扱いされて生きていくのではないかと不安になる。鈴香としては、結婚するのであれば対等な大人として扱ってほしかった。

でもその不満をぶつけたとしても、雅洸のことだ。優しい言葉で鈴香を煙に巻くだけで、本気で取り合ってはくれない気がする。

それどころか、そんなことを本気で訴えたりしたら、今以上に子供扱いされかねない。

だから鈴香は、微かにライムの味がする水と一緒に、自分の不満を呑み込んだ。

——私がもう少し大人になれば、雅洸さんの態度もきつと変わるよね……

だとしたら結婚まで、もう少し時間が欲しい。

そう考えると、雅洸のアメリカ赴任も悪くない。雅洸は多忙だから、明日アメリカに戻ったら、今度はいつ会えるかわからない。

——その間に、大人の女性に成長して……

なにをどうすれば大人になれるのかはわからないが、そんなことを考えてほくそ笑んでいると、雅洸が不思議そうな顔をした。

「どうした？」

「なっ、なんでもありません。アメリカにいるときもちゃんとメールを送ってくれるでしょう？」

私はそれだけで嬉しいですよ」

多少の気恥ずかしさを隠しつつ、そう返す。

雅洗がアメリカから定期的に送ってくれるメールには、彼の近況が書かれているだけでなく、その時々には雅洗が気になっているものの写真がよく添えられていた。海外での雅洗の日常を垣間見ることが出来るその写真を、鈴香は楽しみにしている。

「そう言ってもらえると助かるよ。……鈴香は、いい奥さんになってくれそうだからからかうように笑う雅洗に、鈴香は思わず問い掛ける。

「雅洗さんは、私との結婚に不満はないんですか？」
二人は、鈴香の短大卒業後に結婚する予定となっている。鈴香の年齢を考えれば少し早い気もするが、二人の婚約の立役者である伊ノ瀬豊寿の意見が強く影響しているらしい。

ただし二十一世紀のこの時代、結婚するもしないも本人たちの自由だ。だから二人の結婚話は、「鈴香が大人になったときに、双方に異存がなかったら……」という条件付きで進められているのだ。今ならまだ婚約を解消することができる。

「不満？」

驚いた様子で片眉をつり上げた雅洗は、すぐにクシヤリと表情を崩して微笑んだ。

「俺が鈴香に不満なんて持つわけないだろ。ハナミヤ産業の社長令嬢で育ちも容姿もいいし、性格は素直でおしとやか……そんな鈴香のどこに不満を持って言うんだ？」

「そう……ですか。……それなら、よかったです」

雅洗の言葉に胸の奥がざらつくのを感じつつ、鈴香は話題を変える。

「ところで、仕事は順調ですか？」

「誰に聞いている？」

雅洗の口元には、不敵な笑みが浮かんでいる。

「愚問でしたね」

鈴香が肩をすくめた。

雅洗の有能さは、ハナミヤ産業の社長である鈴香の父親——博茂からも聞かされている。

我が強くて諦めが悪い。それだけならただの頑固者だが、雅洗には商才がある。一度益があると判断した商談は、周囲が難色を示しても強引に押し進めて、必ず結果を出しているそうだ。

雅洗の仕事ぶりを高く評価している博茂は、二人の結婚後は雅洗に自社の経営権を譲りたいくらいだと話していた。

もちろん鈴香のほうが彼の家に嫁ぐのだし、雅洗にはINSの仕事があるので、それは無理な話だと博茂も承知している。それでもそう思わずにはいられないほど、雅洗は経営者としての才覚にあふれているのだろう。

結婚後には、博茂が雅洗に意見を求めたり相談に乗ってもらったりするかもしれない。父の気苦労が少しでも減るのであれば、それは鈴香としても嬉しいことだ。詳しいことはわからないが、最近の博茂は仕事で大きな悩みを抱えているようだから。

鈴香がそんなことを思っていると、雅洗の注文した料理が運ばれてきた。

「鈴香の舌に合うといいんだけど」

そう話す雅洸だが、彼が連れていってくれるお店の料理が、鈴香の舌に合わなかったことなど一度もない。

「雅洸さんの選ぶお店は、いつもとっても美味しいですよ」

「本当はここ、夜のほうが、酒に合う料理が多くて好きなんですけど」

雅洸の何気ない言葉に、鈴香は小さく首をかしげた。

「どうかした？」

「雅洸さん、前にもこのお店に来たことあるんですか？」

「ああ」

「そのときは、お酒を呑んだんですか？ 雅洸さんがお酒を呑んでいるところを、私は見たことないですけど……」

「大人だから、仕事の付き合いや、それ以外でも、酒を呑むことぐらいあるよ。……だけど、未成年の鈴香を連れて歩くときに、酒を呑むわけにはいかないだろう」

お酒だけじゃない。タバコも吸っているはずだ。鈴香の前で吸ったことはないが、デオドラントでは隠しきれない微かな匂いに、雅洸との隔たりを感じてしまう。

「なんか差別」

彼には自分の知らない大人の顔がある。それが不満で眉を寄せる鈴香に、雅洸が困り顔をした。

「差別って……。鈴香が大人になるのを待っているだけだよ」

そう返すと、雅洸が食事を始めたので、鈴香も仕方なく料理を口に運ぶ。

内心面白くない。そう顔に書いてある鈴香に、雅洸がまた「拗ねてる？」と聞いてくる。

——拗ねてるって……

その表現の仕方自体、鈴香のことを子供扱いしている証拠だ。

こうなってくると、もう雅洸の言動全てが癩に障る。

ムスツと黙り込んで食事をする鈴香に、雅洸がやれやれと苦笑いをする。でもそれ以上鈴香の機嫌を取ろうとすることなく、彼も食事を続けた。

食事を終えて店を出ると、雅洸は鈴香を乗せて無言のまま車を走らせた。

——子供扱いされるより、沈黙のほうが辛い。

郊外から都内へと戻る途中で、鈴香が口を開く。

「雅洸さん」

沈黙が続くと鈴香が先に話しかけるのは、子供の頃から決まっている。雅洸もそのことを承知しているから、無理して自分のほうから話しかけたりはしない。

「ん？」

鈴香に名前を呼ばれた彼は、さっきのことを気にする様子もなく普通に返事をした。

良くも悪くも子供の頃から付き合いのある雅洸には、下手な感情の駆け引きなど通用しない。

鈴香も普段と変わらない口調で問いかけた。

「これから、どこ行くの？」

デートのコースを決めるはいつも雅洸なので、鈴香にはどこに向かっているのかわからない。そんな鈴香に雅洸は「映画を観よう」と答え、そのまま車を走らせた。

雅洸が案内してくれた施設は、鈴香が普段利用する映画館よりシアタールームが狭く、六十程度しかない。ただし、そのぶん一つ一つの座席が広くゆったりしている。

本来は公開前の映画の上映などに使われる試写室という施設らしい。個人でも予約出来るのだと、雅洸が教えてくれた。

「なんの映画を観るんですか？」

スタツフに誘導され席に着いたあと、鈴香が雅洸に尋ねる。

すると雅洸は、少し前に話題になった映画のタイトルを口にした。

それは童話をもとにした恋愛ファンタジーで、鈴香が上映期間を勘違いして見逃してしまったと、雅洸にメールしたものだ。

「その映画、もう上映終わってますよ」

ちゃんとメールを読んでくれていない。そうむくれかける鈴香に、雅洸は「問題ない」と答える。彼曰く、それなりの権力と交渉術を用いれば、上映期間が過ぎ、DVDの発売が開始されない作品を上映出来るのだという。

「でも、雅洸さんが楽しめる内容じゃないかも」

映画が観られることを嬉しく思う反面、そう心配する鈴香だが、雅洸は首を横に振る。

「俺も、その映画のCG技術が気になってたから」

どこまで本音かわからないけれど、そう言ってもらえると、鈴香の気が楽になる。自分の趣味に雅洸を付き合わせているのではないと思えるからだ。

「なら、よかったです」

ホツとした表情を見せる鈴香に、雅洸は「俺も、鈴香姫のご機嫌が直ってよかったよ」と返してくる。

——またそうやって、すぐに子供扱いする。

それが年齢差のせいなのか、相手が雅洸だからなのかはわからないが、鈴香が拗ねても怒っても、気付けばいつも彼のペースに乗せられている。

そして子供扱いしながらも、雅洸はさりげなく鈴香を喜ばせてくれるのだ。

でもそれは、彼が一般女性の喜ぶツボというものを熟知しているから出来ることのような気がする。

「そんなことより、映画を楽しもう」と、雅洸が軽く右手を上げる。

その手の動きを合図に、館内の照明が落ちていった。

束の間の暗闇が訪れ、すぐにスクリーンが明るくなる。荘厳なオーケストラの演奏と共に映画の幕が上がった。

「わあ……っ！」

鈴香は思わず感嘆の声を漏らした。

子供の頃から知っている童話がベースなので、話の展開はわかっている。それでも映像の美しさ

や迫力に魅せられて、物語に引き込まれていく。

夢中になって映画に見入っていた鈴香は、ふと気になって隣の雅洸へと視線を向ける。すると、スクリーンではなく鈴香を見つめる雅洸と目が合った。

暗闇の中、スクリーンの明かりに照らされる雅洸の顔に、どこか野性的な荒々しさを感じた。鈴香には、彼が怒っているようにも見える。

——楽しんでるのは、私だけ？

さつきはCG技術が気になると言っていたけれど、雅洸のような大人の男性がこんな予定調和のラブストーリーを観ても、やっぱり楽しくないのだろう。

そのことに気付かず、一人で映画を楽しんでいた自分の幼さが気まずい。

「ごめんなさい」

小声で謝る鈴香に、雅洸は「なにが？」と問いかけてくる。

「私だけ楽しんでるみたいだから」

それを聞いた雅洸が、思い出したようにスクリーンに目を向けた。

「俺も、それなりに楽しんでるよ」

そう小声で返されて、鈴香は疑わしげに雅洸を見た。そんな鈴香の頬に、雅洸の手が触れる。そしてそのまま、雅洸のほうに顔を引き寄せられた。

「……っ！」

雅洸の顔の近さに戸惑う鈴香。その唇に、雅洸の唇が触れる。

突然のことに思考が停止してしまった鈴香は、雅洸の唇が離れてからようやく、自分がキスされたことを理解した。

「えっ……………あの……………えっと……………」

雅洸とは子供の頃からの付き合いだけけど、今までこういうことをしたことはなかった。

だからどう反応すればいいのかわからない。

恥ずかしさにうつむく鈴香の顎を捕らえて、雅洸が強引に視線を合わせる。

「鈴香、大人になったな。今日久しぶりに会って、綺麗になっていたから驚いたよ」

自分を見据える雅洸の眼差しが、鈴香を不安にさせる。鈴香は雅洸の手から逃れて、顔を伏せた。

「……嘘吐き。すぐに私のこと子供扱いするくせに」

「なんのことだ？」

「色々……………例えば、髪型のこととか……………」

その言葉に、雅洸が「ああ……………」と困った顔をして、鈴香の頭を撫でた。そして鈴香の耳元に唇を寄せ、低い声でささやく。

「もし大人扱いしてほしいなら、こんな髪型してきちゃ駄目だ」

意味がわからない。首をかしげる鈴香の耳たぶに、雅洸の唇が触れる。

耳たぶの弾力を楽しむように甘噛みされ、鈴香の全身を甘い痺れが駆け巡った。

ゾクゾクしてしまい、鈴香は背中をわずかに反らす。その反応を見て妖艶な笑みを浮かべた雅洸

が、「考えてらん」と鈴香に問いかける。

「こんなに綺麗に整えた髪を乱したら、どんな淫らなことをしてきたのか、君のご両親にバレてしまっただろ？」

「……」

一瞬遅れて言葉の意味を理解し、鈴香の頬が熱くなる。暗い場所だし顔色などわかるはずがないと思いつつも、鈴香は雅洗の視線から逃れるように、彼の首筋に顔を埋めた。

微かなタバコの香りが混じった雅洗の匂いに、心臓が大きく跳ねる。

——この心臓の音、雅洗さんにも聞こえているのかな？

自分でもうるさく感じる鼓動の高まりを、雅洗に悟られるのは恥ずかしい。そう思った鈴香が体を離そうとすると、雅洗が腰に腕を回して止める。

「大人のデート、したいか？」

どう答えればいいのかわからない。

黙り込む鈴香の顎を雅洗の手が捕らえ、ふたたびキスをしてきた。

さつきよりも強く押し付けられた唇の隙間から、生温かい舌が入り込んでくる。口内でぬるりと動く未知の感触に驚き、鈴香は体をうしろに引こうとした。

けれど雅洗の腕が腰に回されているので、距離を作ることが出来ない。

ゆっくりとした雅洗の舌の動きに、鈴香は肌が粟立つのを感じた。

雅洗は、鈴香の口を強引に開かせ、さらに奥へと舌を侵入させてくる。

自分の舌に彼の舌が触れる。その感覚に、鈴香はビクリと肩を震わせた。

「感じる？」

一瞬唇を離れた雅洗が、からかうように聞いてくる。

そして鈴香の返事を待つことなく、ふたたびその唇を塞いだ。

「ん……あ………くうっ………はああっ」

鈴香が苦しげに息を漏らすと、雅洗は顎を捕らえていた手を下へと移動させていく。

雅洗の大きな手が、ワンピースの上から鈴香の胸の膨らみに触れた。

それだけでも、男女のことに不慣れた鈴香には十分すぎるくらい強い刺激だった。それなのに、

雅洗はさらなる刺激を与えてくる。

「あっ……やあっ」

強弱をつけて胸を揉みしだかれ、体の奥に熱が生まれた。

恥ずかしそうに体をくねらせる鈴香の耳元で、雅洗がささやく。

「大丈夫。最後まではしないから」

小さな子供をあやすような優しい言い方だったが、鈴香は緊張して体を硬くする。

「さっ………最後まで………じゃないなら、どこまでするの？」

掠れた声で問いかけると、雅洗が小さく笑う。

「教えてあげるから、じっとしてて」

雅洗はふたたび鈴香に口付けると、胸を弄んでいた手をさらに下へと移動させた。

「……ふうっ」

鈴香の腰を優しく撫でていた雅洸の手が、スカートの裾をめぐって膝に触れる。

鈴香は慌ててその手を掴んだ。鈴香の小さな抵抗を笑った雅洸は、彼女の耳元に唇を寄せた。

「おとなしくしてないと、スタッフが不審に思っただけ様子を見に来るかもよ」

「——っ！」

彼の言葉に、鈴香は体を硬直させる。

今は鈴香と雅洸の二人きりだけれど、さつき雅洸の合図で上映がスタートしたことを考えると、従業員がどこかにスタンバイしているのかもしれない。

そう思うと、下手な抵抗を示すことも出来なくなる。

鈴香の手から力が抜けると、雅洸は悪戯が成功した子供のようにつめた。

「施設の人に見られたら恥ずかしいから、やめてください」

声を押殺して抗議する間も、自分の鼓動が気になる。まるで鼓膜のすぐそばに心臓があるんじゃないかと疑いたくなるような激しさだ。

雅洸は「それは困った」と唸るけれど、少しも困った様子はなく、鈴香の体を解放してくれる気配もない。

それどころか、また耳たぶを甘噛みしてくる。

「ふあ……っ。耳は駄目ッ」

鈴香が小さな悲鳴を上げると、雅洸はその反応を楽しむように舌で耳の中を撫でた。

そして唾液で湿った耳にささやきかける。

「言っとくけど、結婚したらもつと恥ずかしいことを鈴香にするよ」

「——っ！」

生温かい舌がクチュクチュと蠢く音と、低いささやき声に、鈴香の体が熱く痺れた。

足を撫でられ、耳を舐められただけでもこんなに恥ずかしいのに、「もつと恥ずかしいこと」と言われても困る。

セックスに関する知識がないわけではない。でも、あくまでも年相応の知識があるだけであって、いざその行為を求められると、思考が停止してしまう。

雅洸のほうは、そんな鈴香の反応も含めて楽しんでいるらしく、さらなる緊張を誘うようにワンピースの上から膝を撫でてくる。

「だからこれは練習だ。……さあ、体の力を抜いて」

「……でも……っ。っああ……っ。触っちゃダメッ」

「静かに」

そう窘めた雅洸の手が、スカートの奥へと入り込んでくる。

今は暑い季節でストッキングを穿いていないので、雅洸の手が直に鈴香の下着に触れた。

薄い下着の上から足の付け根を撫でられる。鈴香はビクリと体を跳ねさせて「んっ」と喉を鳴らした。

それでも辛うじて声をこらえた鈴香を、雅洸は「いい子だ」と低い声で褒める。

「……やあ……っ。駄目ッ」

自分でもまともに触れたことのない場所。そこに布越しとはいえ雅洸の指が触れている。それだけで頭がどうにかなくなってしまいそうなのに、雅洸は指先を妖しく上下に動かしてくる。

「——っ」

未知の刺激に、鈴香は思わず背中を仰げ反らせた。

強く押さえ付けられているわけでもないのに、花芯がキリキリと引き絞られるように痛い。その痛みと共に、鈴香の体の奥が妙に疼いた。

それを見透かしているのか、雅洸は触れるか触れないかの微妙なところで焦れつつ指を動かしている。

「んんっ……!」

雅洸に心臓の音を聞かれるのではないかと、恥ずかしがっている余裕はもうない。鈴香はこの切ない熱の逃がし場所を求めて雅洸の背中に手を回し、彼の首筋に強く顔を押し付けた。

「そうやって、素直に感じていればいいよ」

そうささやき、雅洸は長い人差し指を下着の中へと忍び込ませてくる。

彼の指がヌルリとした感触と一緒に薄い茂みをかき分け、鈴香の肉襞に触れた。

「——っ!」

戸惑う鈴香をよそに、雅洸はゆっくりと指を動かす。

「嫌がっているわりには、もう濡れているよ」

「……………」

認めがたい事実を突き付けられ、鈴香は息を呑んだ。

自分の中からなにか熱いものがあふれてくるのは感じていたが、それを雅洸に指摘されると、とたんに羞恥心に襲われる。

「別に恥ずかしがることじゃないよ。鈴香が、俺を欲しがっている証拠なんだから」

雅洸はそう言って、彼女の肉襞に浅く指を入れた。

「やあっ」

不意に与えられた刺激に思わず悲鳴を上げると、雅洸が「心配しなくても大丈夫だよ」と笑う。

「鈴香とは結婚するんだから、焦ってこんな場所で最後まで奪ったりしない」

「う……」

奪うという言葉で、この行為の主導権がどちらにあるのかを思い知らされる。

緊張と羞恥で硬直した鈴香の頬に、雅洸の唇が触れ、そして静かに離れた。

それに合わせて、雅洸の指も鈴香の秘部から離れる。

「続きは、また今度」

解放されてもなお、体には愛撫の余韻が強烈に残っている。鈴香は赤面したまま黙り込んだ。

雅洸は「嫌なら、結婚してからでいいよ」と笑った。

その行為が嫌なわけではない。結婚すれば、当然のようにすることだとも思う。

けれど、その結婚相手が雅洸でいいのか——自分の歩むべき道がこれで合っているのか自信がない。そんな鈴香に、雅洸が宣言する。

「鈴香が短大を卒業して、俺も今の仕事が落ち着いたら、結婚するから」
「えっ……」

結婚しようではなく、結婚すると断言されて、体の熱が一気に冷めていく。
小説やドラマでは、男性が女性に——ときどきはその逆もあるけど——「結婚してください」といった感じで申し込むのが普通だ。それなのに、雅洸は鈴香の意思を確かめようとしなかった。それはあくまでも恋愛結婚の話で、自分たちのような許嫁いらいなまけの間には必要ないのかもしれないが……

ふとスクリーンへ視線を向けると、映画のヒロインが王子様と愛の言葉を交わしていた。
永遠の愛を誓う王子様に、ヒロインが眩まよしいほどの笑顔を見せている。

「……」
花が咲き誇るようなその表情が、鈴香の心に影を落とした。

隣では雅洸が、何事もなかったかのようにスクリーンを眺めている。
なにを考えているのか読み取れないその横顔と、スクリーンを見比べて、鈴香はそつと溜息を吐いた。

——雅洸さんって私との結婚に、なにを求めているのかな？
さっきの行為は、雅洸なりの愛情表現なのだろうか。

だとしたら鈴香も、スクリーンの中のヒロインのように、雅洸の結婚宣言を喜ぶべきだったのかもしれない。

——でも……

なぜだか素直に喜ぶことが出来ない。鈴香は落ち着かない心のまま、雅洸の隣で映画を眺めた。

試写室を出ると、空調がきいた施設内と外の気温差に、くらりと目眩めまいがした。

それに、さっきの雅洸の言葉が妙に心にひっかかっている、もやもやが消えない。

駐車場に向かう雅洸のうしろを無言で歩いていると、彼が不意に足を止めた。

不思議に思って顔をのぞき込んだとき、なにかを見上げていた雅洸の唇が「嘘だろ」と動く。

その視線を追うと、大きな街頭モニターが見えた。

「嘘っ！」

モニターを見上げた鈴香も、息を呑んで硬直した。

無音で流れる情報番組のテロップには『ハナミヤ産業 会社更生法適用へ』とある。

カイシャコウセイホウテキョウ——

よく知っている会社名の後に、不吉な言葉が続いていた。会社更生法ということとは、すなわち会社の経営が立ち行かなくなっているということだ。

すぐさまどこかに電話をかけた雅洸の口から、「倒産?」「間違いないのか?」といった言葉が聞こえてくる。

「……」

自分の身に、一体なにが起きているのか。

世界が足元から崩れ落ちていくような感覚に震えが止まらない。

呆然とする鈴香の体を、雅洸が包むように抱きしめてくれた。

腰に触れる雅洸の手が温かい。

鈴香は自分の手を、彼の手に添えた。モニターを見て一気に血の気が引いた体に、体温が戻ってくるのを感じる。

「俺がいるから大丈夫」

電話の合間に、雅洸が鈴香の耳元でささやいた。

「……私、どうなるんですか？」

しつかりしようと思うのに、声が震えてしまう。

不安な眼差しを向ける鈴香に、雅洸は迷いのない声で言う。

「俺が結婚してあげるから、心配しなくていいよ」

「……」

すがるような思いで彼を見上げていた鈴香は、「結婚してあげる」という言葉に、止まりかけていた指の震えがふたたび強まるのを感じた。

鈴香の家へと向かう車の中で、雅洸がさつき電話で集めた情報をかいつまんで話してくれた。

でも今の鈴香の頭には、その情報がうまく入ってこない。

ぼんやりした頭で理解出来たのは、三つのことだけ。

ハナミヤ産業が事実上の倒産をしたこと。それに伴い、社長である父の博茂が社長職を辞すること。そして、法人債務の連帯保証人である博茂は、財産のほとんどを失うだろうということだった。

「俺がいるから大丈夫だよ」

赤信号で車を停めた雅洸が、左手をハンドルから離して鈴香の手を握る。

「……」

鈴香は雅洸を見た。

前を向いたままの雅洸は、いつもと変わらない強気な顔をしている。鈴香の身に起きたことなど、たいしたことではないのだと、その横顔が物語っていた。

「倒産は決定事項だし、博茂さんの退任も回避出来ない。それに伴って鈴香の生活にも変化が生じるだろう。……でも俺がいるから大丈夫だよ」

「大丈夫って？」

「卒業までの学費や生活費は俺が面倒みるし、卒業した後はすぐ俺と結婚すればいい。鈴香はなにも考えず、今まで通りに過ごせばいいよ」

「今まで通り……」

それは、今まで鈴香に必要なものを与えてくれていた人が、両親から雅洸に変わるだけということだろうか。これからも鈴香は、自分でなにかを選ぶことなく、雅洸に与えられるものをただ受け取っていればいいということだろうか。

「……」

鈴香の人生を、鈴香以外の人が決めていく。
それでは駄目な気がする。

鈴香は雅洗に触れられている、自分の指先を見つめた。いまだに震えが止まらない。

「大丈夫だから」

優しく繰り返す雅洗に、鈴香は問いかける。

「もし明日、雅洗さんの会社が倒産したら、私はどうしたらいいんですか？」

「そんなこと、あるわけないだろ」

「父の会社が倒産するなんて、あるわけない。……私もさっきまでそう思っていました」

微かに震える声で話す鈴香に、雅洗はやれやれと言うように肩をすくめた。

「まあ、この世に絶対なんてないからな。……でも、もしそうなくても問題ない。俺にはそれなりの資産があるし、新たに起業して巻き返すだけの才覚もある」

雅洗はそう断言する。

自信過剰と思われかねない台詞だけれど、雅洗のことをよく知っている人にはわかる。彼の自信は確かな実績に裏打ちされたものなのだ。

「とにかく俺といれば、なんの心配もないよ」

だから怯えることはない、と彼は触れている手に力を込める。

きつと、その通りなのだろう。

今まで両親に庇護されてきたのと同じように、今度は雅洗に庇護されて生きていけばいい。

それが一番楽だ。

——でも……

それはもの凄く危険なことのような気がする。

「どうして、私と結婚しようと思うんですか？」

自分の中に渦巻く不安の出口を探して、鈴香は雅洗に問いかけた。切実な眼差しを向ける鈴香に、雅洗が諭すような口調で答える。

「今さら、ほっとけないだろ」

その言葉に、鈴香は静かに息を呑んだ。

——雅洗さんは、私との結婚に、なにも求めていないんだ。

鈴香と雅洗の間にあるのは、お互いの家の利害関係と、許嫁として過ごすうちに育まれた「親しみ」や「情」といった、恋愛感情とは違う感情なのだろう。

そんな同情的な立場で結婚してもらったら、鈴香はこの先ずっと雅洗に遠慮しなくてはいけなくなる。

そうなればさっきの映画のヒロインのように、愛を告げられて手放しに喜ぶ瞬間なんて一生訪れない。

——私、なにも考えてなかった。

なにもかも与えてもらうことに慣れていた鈴香は、今さらながらに気付いた。自分が、結婚の意味を深く考えていなかったことに。

「……………しません」

鈴香はポツリと呟いた。

「え？　なんて言った？」

うまく聞き取れなかったらしい雅洗に、同じ言葉を繰り返す。

「私は、雅洗さんと結婚しませんっ！」

「……………なんで？」

理解出来ない。ハンドルに体重を預けるようにしてこちらをのぞき込む雅洗の顔に、そう書いてある。

いつもより少し位置が低くなった雅洗の目を見つめて、鈴香は呼吸を整えた。

——雅洗さんの目、初めて同じ高さでちゃんと見た気がする。

子供の頃から見上げてばかりいたし、デートのときは、雅洗に手を引かれて歩くことが多かった。同じ高さで正面から見る雅洗は、凛々しく精悍な顔立ちをしている。

——迷いが無い、自信にあふれた大人の男の顔だ。

そんな雅洗と鈴香のことを周囲が「お似合い」と言ってくれていたのは、「お似合いの二人」ではなく「お似合いの家柄」という意味だったのだろう。

今回のことで、その家柄を失ったも同然の鈴香は、自分のことすら一度も選んだことが無い、中身のない人間だった。

全てを失っても自力で巻き返せるという雅洗とは違って、途方に暮れることしか出来ない。

こんな自分は雅洗に不釣り合いだ。

たとえ彼の情にすがって結婚しても、愛し合う関係にはなれないだろう。なにも出来ない自分は、雅洗にとって真剣に向き合う価値がない。

そのことに気付いてしまった以上、この先雅洗の隣にいても、きつと辛くなるだけだ。

鈴香は心の中で自分にそう言い聞かせ、ゆっくりと息を吐いて呼吸を整えた。

「一方的に頼るだけの結婚なんて、私はしたくないんです。…私は、ちゃんと自分の力で生きていけるようになってから、そのときに好きだと思える人と結婚したいです」

「なにを言ってるんだ？」

「私たちの婚約は、私が大人になったときに双方に異存がなかったら…という条件付きです。今の私は、雅洗さんとの結婚を望みません。だから婚約を破棄します」

鈴香は雅洗の目を見て、そう宣言したのだった。

2　それから五年

ハナミヤ産業が倒産してから五回目の夏が来た。

都内の一等地にある屋敷を失い、無一文になった花宮家の末路は悲惨なものだった。

鈴香の母、香穂子はお嬢様育ちで苦勞したことが無い。そんな彼女が貧乏な暮らしに耐えられる

はずもなく、自分を窮地に追いやった夫、博茂を憎むようになった。博茂自身も会社を失った喪失感から立ち直れず、まるで別人のように性格が変わってしまい、徐々に夫婦間に亀裂が走っていった。

幼稚園からエスカレーター式の名門私立に通っていた鈴香の苦労も、計り知れないものがあつた。短大卒業を間近にして、後期の学費を支払うことが出来ず、自主退学を余儀なくされ……

——というようなことは、まったくなかった。

会社のお盆休みが明けたばかりで忙しく仕事をしていた鈴香は、オフィスにある自分のパソコンの前で、ふとこれまでのことを振り返る。

ハナミヤ産業の倒産以降、確かに大変ではあつた。プール付きの屋敷や別荘を手放したのは事実だし、父が資産のほぼ全てを失つたのも本当だ。

けれど人間、なかなかしぶといものである。

父の博茂は自己破産したものの、母の香穂子が祖父母から受け継いだ資産は手元に残つた。それに鈴香にだって、自分名義の貯金がそれなりにあつたのだ。

根っからの楽道家である香穂子は、博茂を恨むこともなく、彼との新しい生活を前向きに受け入れていた。

そして家族で相談した結果、両親は物価の安い郊外に引っ越し、鈴香だけが都内に残つて短大を卒業することになったのだ。

「花宮さん、二番にミズモトの刑部さんから電話」

「あ、はい」

隣に座る同僚、広瀬千夏の言葉に鈴香は返事をし、デスクに設置されている電話の外線ボタンを押した。

「荻野ガラス、営業部の花宮です」

そう名乗る鈴香に、相手は数日前に送ったサンプルについて次々と質問を投げかけてくる。

それらの質問に答えるべく、鈴香は商品に関するファイルを手ページをめくつた。そうしながら、また当時のことを思い出す。

——一番苦労したのは、就職だったな。

鈴香が通っていた、お嬢様学校と名高い私立短大は、就職には恐ろしく不利だった。

卒業生の進路は結婚か家事手伝い、もしくは留学というのがお決まり。たまたま就職する子がいても縁故採用が当たり前だった。

そんな学校なので就職課はまともに機能しておらず、夏休みが終わってから就職したいと言い出した鈴香の助けにはなってくれなかった。

仲の良かった友達に親の会社で働かないかと誘ってくれたが、鈴香はそれを断り孤軍奮闘。自力で今の会社——荻野ガラスの営業職を手にしたのだった。

荻野ガラスは業界では中堅どころに位置する会社で、技術力に定評があり、海外メーカーからも注文がある。

国内外問わず舞い込む注文に対応するため、社員が時間差で働いており、大企業のように豊富で

はない人員の穴を補うべく、一人一人が頑張っている。そんな会社なので常に活気に満ちていて、鈴香自身も仕事にやりがいを感じていた。

——与えてもらう幸せは、楽だけど危うい。

それがハナミヤ産業の倒産から始まる一連の出来事を受けて、鈴香が導き出した結論だ。社会人生活も五年目。それだけの時間を自力で過ごしてきた今の鈴香には、仕事に対するプライドも自信もある。だから昔のような贅沢ぜいたくは出来なくても、毎日が楽しくてしょうがない。

もしあのとき、雅洗の情にすぎるような形で結婚していたら、自分はもつと卑屈ひくつな人間になっていたと思う。

だから雅洗との婚約を解消したことを、少しも後悔していなかった。

「——わかりました。では、その方向で進めさせていただきます」

そう言っただけで電話を切り、鈴香は深い溜息を吐く。すると千夏が「またネチネチ言われた？」と聞いかけてきた。

ミズモトの刑部といえば、サンプルを受け取るたび、添付てんぷされている資料を読めばわかることまでネチネチと質問してくることで有名だ。しかも開発部の者に問い合わせたほうが早いのに、必ず営業部に説明を求めてくる。

「私どもではわかりかねますので開発部に……」と言っただけで電話を回そうとしても、「自分たちが理解してない商品を、他人に売り付ける気かっ！」と怒り出すのだ。だから営業部の人間には敬遠されている。

「ああ、刑部さんのことなら大丈夫です。虎の巻とらまきを用意しますから」

そう言っただけで鈴香は千夏に、手にしていたファイルを見せる。

それは刑部の性格を承知している鈴香が、サンプルを送る際に必ず用意しておく想定問答集だ。確かに刑部は、重箱の隅すみを突くような細かい質問をしてくる。だが自分が納得した製品には、金額の交渉をすることなくすぐに発注してくれるので、ありがたい存在でもあった。

そんな刑部と円滑な商談をするために、鈴香は前もって彼が質問してきそうなことを想定し、開発部に確認しておくことにしている。

その結果、刑部の対応は花宮に……、という暗黙のルールが出来上がっていた。

ミズモトが都内に会社を構えていないこともあり、刑部とのやり取りはもっぱら電話だが、数回顔を合わせたことがある。太い眉をした白髪しろが交じりのおじさんで、見るからに頑固オヤジだった。

だが、そんな刑部との仕事で、鈴香は嫌いではない。だから鈴香としても、刑部の対応を任せられるのは嬉しいことなのだ。

「うわっ！ 専門用語がいっぱい」

虎の巻とらまきのパラパラめくって、千夏が驚きの声を上げた。

千夏は三年制の専門学校を卒業していて、年齢は鈴香より一つ上だ。けれど鈴香とは同期入社なので、営業部の中では一番親しい仲である。

「花宮さん、偉いねえ」

千夏が感心した様子で何度もうなずくと、その動きに合わせて彼女の癖毛くせげが揺れた。

無理して自分を飾っても疲れるだけ。そう公言している千夏は、髪型もメイクもナチュラルを心がけていて、外見同様、性格も見栄をはらないさっぱりしたものだ。

そのおかげで取引先のウケもよく、特に年配の人には男女問わず可愛がられている。

「自分の知識力に自信がないし、臆病だから、出来るだけ事前準備をしておきたいんです」

「それは謙遜ってヤツだよ。花宮さんは、偉いよ」

鈴香を褒めながら、千夏がファイルを返してきた。

鈴香はそれを受け取りつつ、「そんなことないです」と首を横に振る。

「私なら相手が刑部さんでも、『わからないので、確認して折り返します』って無理矢理電話切っちゃうと思うよ」

千夏がそう言っつて、あつげらかんと笑う。

「それはちよつと、危険かもしれないですね……」

刑部の激昂した姿を想像して、二人同時に苦笑いが漏れた。

相手が刑部以外なら、その対応で問題ない。その場しのぎの中途半端な回答をして信用を失うよりよっぽどいいし、いち営業部に専門的な知識など求めていない人がほとんどだ。

でも鈴香は、自社の扱っている商品がどんなものなのか、事前に把握しておきたいのだ。なにも知らうとせず、ただ流されることの危うさを知ってから、些細なことでも自分で確かめるようになった。

「やっぱり刑部さんの相手は、花宮さんしか出来ないよ」

「私の臆病な性格と、刑部さんの細かい性格がたまたま合ってるだけですよ。私の場合、逆にちゃんと確認してくれない人のほうが苦手なんです」

「そんなものかな？」

「そんなものですよ。……それに最近気付いたんですけど、刑部さんが本気で知りたいのは商品のことじゃなくて、うちの社員が自社の製品をどれくらい信頼して、自信を持って薦めているかどうかってことなんですよ」

「なるほど。……じゃあ、なんで溜息なんか吐いてたの？ 刑部さんのせいじゃないの？」

「ああ、それは……」

昨夜、自宅のパソコンに届いたメールが原因だ。けれど、そのことは話題にしたくないので、鈴香は「昔の知り合いとちよつと」と曖昧に答えた。

「そうなんだ」

良くも悪くも物事を深く追及しない千夏は、「じゃあ、これあげるから元気出して」と、自分のデスクの中からチョコレートを取り出し、鈴香のデスクに置く。

鈴香は千夏にお礼を言っつて、刑部との電話の内容を部長に報告すべく立ち上がった。

そして歩きながら、昨日雅洗から届いたメールの内容を思い返す。

『日本に戻った。明日、迎えに行くから食事をしよう』

そんな文章から始まるメールには、雅洗がINSの開発本部長に就任すべく帰国したことも書かれていた。

鈴香は、そのメールに返事をしていない。

——だって、なんて返せばよかったの？

婚約を破棄してからも、雅洸からはときどきメールが届いていた。

鈴香の暮らしぶりを案じる内容のときもあれば、雅洸の仕事ぶりに関することや、日常の些細な出来事を伝える内容のときもあった。頻度は婚約していたときよりも多いくらいで、話題も様々だ。写真が添えられていることもある。

だが、もし雅洸からメールをもらっていないなくても、鈴香は彼が順調に出世していることを知っていた。

長い付き合いなので、共通の知り合いが多い。鈴香の生活環境が一変した今も、昔と変わらない付き合いをしてくれる人もいて、彼らの口から雅洸の噂を聞くことがあった。

特に鈴香の母方の遠縁にあたる有川尚也は、雅洸と高校生時代からの親友ということもあり、鈴香と会うと必ず雅洸の近況を教えてくれた。

——付き合い、無駄に長すぎるから……

鈴香は溜息を吐く。

子供の頃からの知り合い。婚約を解消したところで、その事実が変わらない。

しかも明確な恋愛感情に基づいて付き合い合っていたわけではない分、男女のドロドロとしたしがらみがないので、婚約を解消したからといって邪険に扱う理由も見当たらない。

結婚の予定がなくなった今、鈴香と雅洸はただの幼なじみのような関係になっている。

だから、メールを受け取れば普通に返信していた。けれど、いざ会おうと言われると、どんな顔をして会えばいいのかわからない。

実は今までも、雅洸が一時帰国した際に食事に誘われることはあった。でも、なにかと理由を付けて断り続けてきたのだ。

元許嫁として、もしくはいち幼なじみとして、雅洸の出世を祝いたい気持ちはある。でも帰国が突然すぎて、気持ちの整理が付かない。

鈴香から返信がなければ、雅洸も食事の話は流れたと思うだろう。

今一人暮らしをしているマンションの住所を教えた覚えはないし、鈴香の仕事が何時に終わるのかも雅洸にはわからないはずだから、突然迎えに来られる心配もない。

——まあ、とりあえず今日のところはスルーしておこう。

鈴香は、そう決めて部長のもとへと向かった。



「ありえない……」

いつも通りに仕事をこなし、自宅マンションの近くまで戻ってきた鈴香は、目の前の光景に目眩を感じた。

転ばないよう道路脇にあるカーブミラーのポールにしがみ付き、もう一度マンションのほうへと

視線を向ける。

「花宮鈴香様、お帰りをお待ちしておりました」

プレスの利いたスーツ姿の男性が、うやうやしく頭を下げる。そして「どうぞ」と、背後にある白いリムジンのドアを開けた。

「あの……これは……?」

鈴香はおぼつかない足取りで男性に歩み寄り、リムジンを指差す。

「伊ノ瀬雅洗様より、花宮様のお迎えを承^{うけたまわ}っております」

男性の言葉に、鈴香は「でしょうね」と心の中で返した。自分で質問しておいてなんだが、こんな派手なお迎えをよこす知人など彼しかない。

「雅洗さんは、『仕事が長引いて迎えに来られない』のパターンですか?」

「左様でございます」

と、運転手の男性は手でリムジンを示し、鈴香に乗車を促^{うなが}す。

婚約時代も雅洗は、仕事^{しごと}が長引いて約束の時間に迎えに来られなくなったときには、こうしてリムジンをよこしていた。

当時の鈴香は深く考えることなく、はしゃいでリムジンに乗り込んでいた。きつとあの頃と同様、リムジンの中には花束と、鈴香の好きな飲み物やスイーツが用意されているのだろう。

でも、ごく一般的な社会人生活を四年も送った今、それがどれだけ無駄遣いだったのかわかる。

そして今さらながらに、もう雅洗とは住む世界が違うのだと痛感した。

鈴香は、やれやれと眉間を押さえて、きつぱりと言う。

「迎えは必要ありません。目立って恥ずかしいから帰ってください」

「それでは、私が伊ノ瀬様に怒られます」

運転手の男性が、すかさず返してきた。

「そもそも今日、会う約束なんてしてないんですけど」

「当方では、そのようにはうかがっておりますので」

彼は鈴香に乗車を求めるべく、さらに深く頭を下げる。そんな二人のやり取りを、通行人が興味津々な目で眺めていた。

「……………」

高級感あふれるリムジンを前に、いつまでもここで話している方が恥ずかしい。

鈴香は仕方なく、つやつやと車体を光らせるリムジンへと乗り込んだ。

そして革張りのシートの上に置かれている花束に、「やっぱりね」と、溜息を漏らした。

滑らかに動き出すリムジンの中で、鈴香は花束を抱え、それに添えられていたメッセージカードに視線を向ける。そこには「久しぶりに会えるのを楽しみにしている」と書かれていた。

——雅洗さん、誰にでもこういうことするのか?

大人になるにつれうすうす感じていたことではあるが、やはり雅洗は女性の扱いに慣れていた。鈴香を……というより、女性を喜ばせる手法を熟知している。

——まあ、よく考えれば当然のことだよな。

有名企業の御曹司^{おごうし}。完璧な学歴と経歴に、端正な顔立ち。レディーファーストを心得ていて、大人の魅力にあふれている。そんな雅洗を、世の女性たちが放っておくわけがない。

雅洗にその気があれば、いくらでも恋愛を楽しむことが出来たのだろう。

——結局私たちの結婚つて、将来的にINSがハナミヤ産業を傘下^{かさか}に収めるためのものだったんだよね。

伊ノ瀬の一族は、野心家が多い。鈴香と雅洗の婚約を取りまとめたのは、一族の中でも特に野心が強い、雅洗の伯父の豊寿だった。

花宮家には鈴香しか子供がいらないから、もしあのまま結婚していれば、夫の雅洗がハナミヤ産業の経営に強い影響力を持つことになっていただろう。

それを狙って許嫁^{いしなご}にした鈴香が、ハナミヤ産業の娘という価値を失ったとき、雅洗がとっさに「結婚してあげる」と言ったのは、愛情ではなく彼の優しさだ。

——あの頃の私は子供すぎて気付かなかったけど、今ならわかる……

少しも対等な関係でなかった雅洗に、鈴香の知らない恋人がいても不思議はない。同情で結婚してもらったとしても、きつと誰も幸せにはなれなかつただろう。

それに今になって考えると、鈴香自身、雅洗のことをどう思っていたのかよくわからない。ただ雅洗に大人の女性として扱ってほしくて必死だった。

それは間違いなく、当時の鈴香の正直な感情だ。でもそのときの鈴香は本当に子供で、雅洗と結婚することが人生の正解なのだと思います。自分が抱いていた雅洗への感情が、恋なのか憧

れなのか、今となってはよくわからない。

「……………やっぱり、まだ会いたくないな」

どんな顔をして会えばいいのかわからないし、下手に会って、あの頃雅洗に抱いていた感情の正体を知ってしまうのも怖い。

鈴香は、雅洗からのメッセージカードを裏返して花束に挿すと、シートに置いて出来るだけ遠くに押しやった。

やがてリムジンが辿り着いたのは、閑静な場所にある会席料理の店だった。

歴史を感じさせる大きな門の前で車が停まると、和服姿の仲居が出迎えてくれた。

深々と頭を下げた仲居は、車から降りる鈴香を見て怪訝^{けげん}な表情になり、リムジンの奥をうかがう。そして乗客が鈴香一人だと確認して、もう一度頭を下げてきた。

きつとリムジンで乗り付けた客が、安物のビジネススーツを着た女性一人で、しかも高そうな花束を抱えているというパターンが初めてで、戸惑ったのだろう。

それでも彼女は何事もなかったかのように笑みを浮かべ、鈴香を中に招き入れた。

仲居に案内されたのは、立派な座敷だった。漆喰^{しつこ}の壁に日本の植物が描かれていて、和紙を使った照明が部屋全体を柔らかな色調に染めている。

まだ雅洗の姿はなかった。仲居が座敷の上座に座るよう勧めるのを断り、鈴香は下座に腰を下ろす。

——高そう……

個室に一人残された鈴香は、金額の書かれていないお品書きを手に取り、思わず眉をひそめた。想定外の成り行きではあるが、せっかく会うのであれば、雅洗の出世を祝して自分が馳走したと思う。もう彼の婚約者ではないのだし、働いてお給料をもらっているのだから当然のことだ。そうは思っても、店の格調が高すぎて会計が不安になってくる。

——最悪カードで払って、その後しばらく節約生活を送れば大丈夫だよ。

そう結論付けてお品書きを元の場所に戻したとき、入り口の襖が静かに開いた。

「待たせたな」

そう言つて、雅洗が部屋へと入ってくる。

そして鈴香の向かいの席に腰を下ろした。

——雅洗さん、一段と大人っぽくなってる……

老けたという意味ではない。体格や風貌に大きな変化はないが、海外で仕事をこなしてきたゆえの貫禄のようなものをまとつていて、オリジナルの美しさにあふれた雅洗の存在感をさらに際立たせている。

きつと海外でも、女性にモテていたのだろう。

そう思うと、心の奥のほうの意味もなく軋んだ。

仲居に日本酒の銘柄を確認していた雅洗が、ふと鈴香を見た。

「鈴香、酒は呑めるようになったのか？」

当然のようにファーストネームで呼ばれて、鈴香は「度数が低いのなら」ときこちなく答える。すると雅洗は口元だけで笑つて、酒の注文を済ませた。

そして仲居が運んできた酒を一口呑んでから、「久しぶり」と改めて挨拶をしてくる。

久々に聞く雅洗の低く掠れた声が、耳に心地よい。

「お久しぶりです。それと、ご昇進おめでとうございます」

鈴香は一度べこりと頭を下げた後、「でも……」と言つて厳しい表情を雅洗に向けた。

「今日、会う約束をした覚えはないです」

自宅マンション前での運転手とのやり取りを思い出し、鈴香はむくれる。しかも仕事用の地味なスーツ姿で、リムジンで高級会席の店に乗り付けるなんて恥ずかしすぎた。

「沈黙は肯定のサインだと思った」

悪びれる様子もなく返す雅洗に、鈴香は抗議を続ける。

「あと、あんな恥ずかしい迎えをよこすのは、やめてください。ちゃんと約束をしていれば自分の足で会いに行きます」

「女性を一人で店に向かわせる。……そんな恥ずかしいこと、出来るわけないだろう」

いや。リムジンで迎えに来られるほうが、よっぽど恥ずかしい。

「そもそも私、雅洗さんに住所を教えた覚えはないんですけど」

「共通の知り合いが、何人いると思ってるんだ？」

雅洗はそう笑うと、杯を軽く持ち上げて中身を飲み干した。

「……確かに」

鈴香が知人の噂話から雅洸の近況を知ることが出来たのと同じように、雅洸にも鈴香の情報が筒抜けになっていたのだらう。

「それより遅くなっただけど、荻野ガラスへの就職おめでとう」

就職したことはメールで報告したが、会社名まで教えた覚えはない。どうやら鈴香の与り知らぬところで、かなりの個人情報が出流しているらしい。

「ストーカーみたい」

鈴香の苦言に、雅洸がニヤリと笑う。

「ちゃんと気にかけてるんだよ。お前だって俺の近況、尚也に聞いてたくせに」

「……」

いつもこうだ。

全てが雅洸のペースで進んでしまう。

鈴香は、雅洸が注文した梅酒の炭酸割りに口を付ける。深い梅の味が、炭酸の刺激と一緒に広がった。

上品な梅の味に思わず顔を綻ばせていると、食事が運ばれてきた。

先付から始まる会席料理をゆつくり食べ進めながら、ポツリポツリと言葉を交わす。

会話の主導権を握っているのはもちろん雅洸で、鈴香は彼の質問に答えたり、彼の近況報告に相槌を打ったりするだけだった。

けれど、昔と変わらない空気感に、自然と心が和む。むしろ昔より雅洸の態度が気安くて、距離が縮まった気さえしていた。

「だいたい、迎えてもよこさなきや、お前は会おうとしないだろ」

ハイペースで酒を呑む雅洸が、さっきの話を蒸し返す。

「どうしてそう思うの？」

「一時帰国するたびに食事に誘ってたけど、お前いつも、俺の誘いをのりくらりと断ってたじゃないか」

「のりくらりって……雅洸さん、自分の予定に空きが出来たときに突然誘ってくるから、タイミングが合わなかっただけです。……ほら、就職してからは私も色々忙しかっただし」

それは半分嘘だ。

雅洸が短い帰国の合間に食事に誘ってくれることがあっても、鈴香は適当な理由を作って会うことを避けていたのだ。

「ふうん」

疑わしげな目を向けてくる雅洸に、鈴香はペコリと頭を下げた。

「……ごめんなさい」

いざこうして顔を合わせてみれば、意外と普通に話せる。

こんなことなら必要以上に避けたりしないで、ただの幼なじみとしてもっと気楽に会ってもよかったのかもしれない。

素直に謝る鈴香の前に、雅洸はどこか照れた様子で首筋をかく。こんな些細な仕草も、婚約していたときには見られなかったので、鈴香は少しドキドキしてしまう。

「まあ、別にいいけど……でも今日は大事な話があるから、どうしても鈴香に来てもらわないと困るんだ」

だからといって、マンションの玄関先にリムジンをよこすのはやめてほしい。

そんな思いで溜息を吐く鈴香に、杯を食卓に置いた雅洸が真剣な眼差しを向けてきた。

「……？　どうかしましたか？」

「実は、そろそろ結婚しようと思うんだ」

「——っ！」

突然の宣言に、鈴香は一瞬固まってしまふ。

——ああ、そういうことだったんだ。

鈴香はそつと箸を置く。

雅洸が強引にでも鈴香を食事に誘い出したのは、元婚約者である自分にそのことを報告しておきたかったからなんだ。

「……そうなんですな」

「ああ」

伏し目がちにうなずく雅洸が、とつくり手に手を伸ばす。

婚約を破棄したときから、いつかこういう日が来るのはわかっていた。でもいざその日を迎える

と、なんだか変な気持ちになる。

鈴香は、動揺を抑えて頭を下げる。

「おめでとございます」

「ん？」

鈴香の言葉に、雅洸がキョトンとした。

「——？」

不思議そうな顔をされ、鈴香も同じような顔をする。

「なんだか、妙に他人行儀な反応だな」

「だって、もう……」

もう自分たちは他人同士だ。

そう思う鈴香を指差し、雅洸が苦笑いを浮かべる。

「自分の結婚なんだから、もうちょっと違う反応があるだろう」

「はい？」

うしろにのけぞって驚く鈴香に、雅洸が怪訝な目を向ける。

「ん？　なにを驚いているんだ？」

「……雅洸さん、誰と結婚するつもりなんですか？」

「……」

雅洸が無言のまま、鈴香を顎で示す。

——いやいや、ありえない。

鈴香は慌てて首を横に振る。

「ちよっと待ってください。なんで私が雅洸さんと結婚するんですか？ だって婚約は、とっくに解消したはずですよ」

「そんな覚えはない」

雅洸が強い口調で断言した。

いや。ハナミヤ産業が倒産した日に、確かに婚約破棄を申し出たはずだ。

そのことを指摘する鈴香に、雅洸が事務的な口調で返してくる。

「その申し出は覚えているが、受諾した覚えはない」

「……」

思わず黙り込む鈴香だったが、当時の記憶を探り、「で、でも」と声を上げる。

「あのおとき雅洸さん、『とりあえずわかった』って言ったじゃないですか」

「とりあえず……だろ？ その後、『今は動揺しているだろうから、落ち着いたら話し合おう』とも言ったはずだ」

「うっ……」

確かにそう言われた気がする。

ひるむ鈴香を見て、雅洸はさらに痛いところを突いてくる。

「それ以降、お前は俺がどれだけ誘っても会おうとしなかったな」

「……っ」

「あのおときの鈴香は『一方的に頼るだけの結婚なんてしたくない』と言っていた。就職して立派に自活している今なら、結婚しても問題ないだろう」

「……」

いや、問題だらけだ。

とっくに婚約破棄したつもりでいたのに、今さらそんなことを言われても困る。

感情が追いつかず言葉を失う鈴香に、雅洸がたみかける。

「というわけで、結婚式はいつがいい？ あと、希望の式場はあるか？ あるなら、そこを予約し

よう。それと、結婚後の新居だが……」

「ちよ、ちよっと待って……っ！」

鈴香は慌てて話を遮る。

「ん？」

「雅洸さん、本気で私と結婚するつもりなんですか？」

「当たり前だろ」

「どうして？」

「海外赴任が終わり、しばらくは日本での勤務が続く。年齢的にもちよっどいい。そろそろ落ち着くの、妥当なタイミングだと思わないか？」

鈴香の戸惑いの理由を理解することなく、雅洸は淡々と話す。そんな雅洸の声を鈴香はふたたび

遮った。

「そつ、そういうことじゃなくて。私と結婚しても、雅洗さんにメリットはないですよ」

鈴香の言葉を、雅洗が「なんだそれ」と鼻で笑う。

「だって私と雅洗さんの結婚は、ハナミヤ産業ありきの政略結婚だったんでしょ？ だったら今の私と結婚しても、伊ノ瀬家にはなんのメリットもないはずですよ」

「ああ。そうだな」

雅洗は、政略結婚の事実をあつさり認めた。

鈴香と違い、婚約したときにはもう十分大人の考え方が理解できる年齢だった雅洗は、二人の結婚の意味を理解していたのだろう。

「じゃあ、なんで今さら私と結婚しようと思うんですか？」

「鈴香が、俺の許嫁だからに決まってるだろう」

即答する雅洗に、鈴香は目眩を感じて額を押さえた。

指の間から雅洗の様子を確認すると、余裕の笑みを浮かべて鈴香の反応を待っているのが見えた。

——同情……だよな？

自分で認めるのは癪だが、それ以外に理由が思い付かない。お嬢様だった鈴香が安物のビジネススーツに身を包み、毎日あくせく働いていることを憐れんでいるのだろうか。

それなら心配無用と、鈴香は片手を前に出してきっぱり宣言する。

「お断りします。私、雅洗さんがいなくても平気ですから」

「平気？」

「今の仕事を気に入っているし、雅洗さんに頼らなくても暮らしていけるくらいには稼いでます。だから、雅洗さんに結婚してもらおう必要はありません」

その言葉に、雅洗の眉がぴくりと動く。そして彼は「ほう」と息を吐いた。

「だから雅洗さんは遠慮なく、他の誰かと結婚してください。……今まで婚約の件が保留になつたつて言うなら、今日この瞬間、正式に婚約を破棄しましょう」

お互いの幸せのためには、それが一番いい。そう思う鈴香だったが、雅洗は「却下だ」と低い声

で言った。

「はい？」

「婚約破棄を却下する。そう言っているんだ」

「なんで……？」

意味がわからない。顔を引きつらせる鈴香に、雅洗が胸を張って答える。

「俺が誰と結婚しようが俺の自由だ。誰かに指図される筋合いはない」

「そうだけ……いや、そうじゃないでしょ」

結婚には、双方の合意が必要なのだから。

なかば呆れつつ説明する鈴香に、雅洗は「なるほど」と一応の納得を見せた。

「わかってもらえましたか。じゃあ、今度こそ……」

婚約を破棄しましょう、と言いかけた鈴香に、雅洸が強気な視線を向ける。

「それなら、鈴香が俺と結婚する気になれば、なんの問題もないな？」

「……」

なんでそうなるの？ と言いつ返そうとしたタイミングで「失礼します」と、襖ふすまが開けられた。

慌てて話を中断させる鈴香に、雅洸が不敵な笑みを浮かべて高らかに宣言する。

「言っておくが、俺は一度決めたことを、そうそう諦める人間じゃないぞ」

それは鈴香もよく知っている。

面倒くさいことになった。そう感じつつ、鈴香は新たな料理を運んできた仲居に頭を下げるのだった。

3 婚約者の距離感

雅洸との再会から一週間。

あいかわらず仕事熱心な鈴香は、荻野ガラスの開発部とのランチミーティングに参加していた。

——ガラス開発は、強度だけでなく軽さも重要だよ。

参加者の話を聞きながら、鈴香は改めて納得する。

ただ頑丈なガラスを作りたいのであれば、単純に厚くすればいい。でもそうすると厚みの分、重

さも増してしまう。

最近のスマホが初期のものよりずいぶん軽くなった理由の一つに、ガラスの軽量化が挙げられる。

「花宮さん、部長が呼んでたわよ」

ミーティングが終わって自分の席に戻るなり、隣の席の千夏に声をかけられた。

鈴香が部長のデスクに視線を向けると、そこには誰もいない。千夏が「応接室で待ってるって」

と付け足した。

「応接室？」

なんでわざわざそんな場所に……と思いつつも「了解」と返して、鈴香は応接室へと向かった。

「失礼します」

重厚な木製のドアをノックして中に入ると、部長がソファアに腰かけたまま「呼び出してすまん」と軽い口調で詫びてきた。

応接室にはもう一人、開発部の責任者である佐々木ささきという四十過ぎの男性もいた。

長身でヒョロリとしている佐々木は、仕事は出来るが人と話すのが苦手とのことで、ランチミーティングにも参加しない。今日も鈴香の顔を見るなり、「じゃあ、あとはよろしくお願いします」と部長に声をかけて部屋を出ていった。

「適当に座ってくれ」

部長にそう言われ、鈴香は彼の向かいのソファアに腰を下ろした。

「早速だが、花宮君に頼みたい仕事があるんだ」と、部長が話を切り出した。

「はあ」

それならデスクですればいいのに。そんな鈴香の心を読んだように、部長が続ける。

「まだ正式に決まっていけないので、公にはしてもらいたくないのだが……」なるほど、それでわざわざ呼び出したのか。

納得する鈴香に、部長は仕事の内容を話し始めた。

◇◇◇

その日の仕事帰り、鈴香は軽い足取りで自宅マンションへと向かっていた。

——佐々木さん、私のこと評価してくれてたんだ。

応接室での部長の話によると、とある大手企業から、新商品に荻野ガラスの製品を使いたいという相談があったとのこと。

ただしそのためには、安定した生産量の確保と共に、品質についていくつかクリアしなければならない条件があるのだという。

そこで開発部の佐々木が試作品を作り、先方と改善箇所を詰めた上で具体的な商談へ……ということでは話がまとまったのだが、佐々木はいかんせんコミュニケーション能力に乏しい。

彼は、相手が求める条件をクリアする自信はあるが、相手の意見を聞き出し要望をまとめる能力が自分には欠けているので、間に入ってくれるサポーターが欲しいと部長に申し出たそうだ。

開発部は人員が少ないし、そろばん勘定に弱い。先方も、コスト面を含めて話し合いを円滑に進めるために、営業部の人間に間に入ってもらうことを望んでいるのだという。

そして、佐々木が「出来れば、そのサポーター役に花宮君を……」と鈴香を指名してきたのだという。

「花宮君が営業の若手の中では一番努力家で、自社製品への理解も深いから」と、佐々木が評価していたと部長から聞かされた。

佐々木とはろくに話したことがないので妙な感じだけけど、自分の努力を認められて、悪い気はしない。

他の仕事もたくさん抱えていて忙しい時期ではあるが、喜んで引き受けた。

はずむ気持ちでマンションの前まで戻ってきた鈴香は、視線の先にある車の存在にガクリと肩を落とした。

「遅かったな」

運転手にドアを開けてもらい、車を降りてきた雅洸が言う。

——待ち伏せしてるし……

とうの昔に破棄したと思っていた婚約話を蒸し返されてから一週間。雅洸が鈴香の帰りを待ち伏せていたのはこれで三回目だ。

鈴香は、肩からずり落ちそうになった鞆かばんの紐をかけ直した。
「残業してたんです」

歩み寄ってくる雅洗と、彼が今降りてきた車に、鈴香は厳しい視線を向けた。

「ん？　どうかしたか？」

「いたって庶民的なマンションに、運転手付きの車で乗り付けるのはやめてください。周囲の景観にそぐわなくて浮きます。迷惑です」

雅洗は背後をチラリと振り返って肩をすくめた。

「毎回毎回、文句が多いな」

苦笑いを浮かべる雅洗の言葉に、鈴香はムツと眉を寄せる。

鈴香の文句の原因は、雅洗にあった。ここ一週間、雅洗は毎日花を贈ってくる。自分で来られない日は、宅配サービスを使ってまでよこすのだ。

とうとう昨日、鈴香の怒りが爆発した。「狭い部屋が花で埋め尽くされて迷惑です。女性はみんな花をもらえば喜ぶと思わないでください」と怒ったのだ。

その説教が効いたのか、今日の雅洗は花束を持っていない。

「この車が似合わないマンションに住んでる鈴香が悪いんだろ。文句があるなら引越せばいい。なんなら、俺のマンションに越してくるか？」

「ハア……」

何かにつけて、すぐにこれだ。

最初は同情から結婚話を進めようとしていると思っていたのだが、もしかしたら雅洗は、鈴香に断られたことで意地になっているだけなのかもしれない。

——結婚って、同情や意地をするものじゃないと思うんだけど……

なんてことを言ったところで、よけいに雅洗を意固地にさせてしまうだけだろう。

「引越してこいよ。な？」

雅洗が明るい表情で誘ってきた。

「お断りします。ここが気に入っているのです」

「じゃあ、車のことは我慢するんだな」

鈴香がまた雅洗を睨にらむと、彼が「反抗期か？」と、からかってくる。

——話にならない。

大きく息を吐いた鈴香は、「明日も仕事があるから、おやすみなさい」とだけ言い残し、雅洗の前を通り過ぎようとした。

そんな鈴香を、雅洗が「こちら」と引き止める。

「なんですか？」

「俺が用もないのに、わざわざここで待ってたでも思うのか？」

そう言っつて、鈴香に小さな手提げの紙袋を差し出した。

「……？」

視線で問いかける鈴香に、雅洗が「プレゼント」と付け加える。

「どうやら昨日の鈴香の苦情を踏まえて、今日は花束以外のものを用意したらしい。
「いりません」

鈴香はそう返してふたたび歩き出す。その後を雅洸が付いてきた。

「どうして？」

「受け取る理由がないからです」

「婚約者にプレゼントを贈るのに、理由なんて必要ないだろ？」

「だから、もう婚約者じゃないです」

鈴香が雅洸を振り返り、「言っておきますけど、部屋には入れませんよ」と宣言する。

一緒に会席料理を食べた日、「まだ話は終わってない」と言って家上がるうとする雅洸を追い返すのに苦労したのは、まだ記憶に新しい。

——そういえばあの日の食事代、結局、雅洸さんが支払ってくれたんだよね。

お祝いの意味を込めてご馳走する気であったのに、突然蒸し返された婚約話に動揺している間に、

雅洸が支払いを済ませてしまっていたのだ。

——気を抜くと、すぐに雅洸さんのペースに流されちゃう。

油断してはいけないと、鈴香は気を引き締める。

「エレベーターまで送るよ」

雅洸はそう言った。毎回追い返されているので、部屋に入れてもらうことは諦めたらしい。それでもついで、疑いの視線を向けてしまう。

「……」

「せつかく待ってたんだから、そこまで送るくらいいいだろ？」

エレベーターホールはもう目の前だし、これ以上無下に断るのも大人げない。

「じゃあ、そこまで……」

鈴香が渋々応じると、雅洸がその後を付いてくる。

そしてエレベーターに乗り込む鈴香を大人しく見送ってくれた……かと、一瞬思った。

「鈴香、忘れ物」

雅洸が、鈴香を追いかけるようにエレベーターに一步足を踏み入れて、鈴香の肘を強く引いた。

「え？——っ！」

強引に引き寄せられたかと思うと、次の瞬間鈴香の唇に雅洸の唇が触れる。

「……」

「……」

覆いかぶさるようにして鈴香の唇を奪った雅洸。彼は突然のことにフリーズしている鈴香に紙袋を握らせ、足をエレベーターの外へと戻した。

「おやすみ。また明日」

勝ち誇ったように笑う雅洸が、ひらひらと指だけを動かす。

一瞬遅れて我に返った鈴香は、エレベーターのドアが閉まる直前に、「最低っ！」と叫ぶのがやっとなった。

立ち読みサンプル
はここまで

雅洗の高笑いが聞こえた気がして、腹立たしい。
鈴香はムツとしながら、スーツの袖で唇を拭った。

その手には、雅洗に持たされた紙袋がある。一応中を確認すると、有名ブランドの香水の箱が見えた。

ピンクのパッケージが可愛いこの香水は、最近雑誌でよく見かける。柔らかな甘い香りは鈴香の好みだけれど、子供っぽい気がして買わずにいた商品だった。

——私のこと、まだ子供扱いしている。
「本当に最低……」

不意打ちのキスをしてくる雅洗ではなく、雅洗の悪戯なキスに、こんなにドキドキしてしまう自分に腹が立つ。

鈴香は、熱くなった頬を両手で包んで、唇を噛んだ。

自室に入った鈴香は、着替えて化粧を落とすと、パソコンの電源を入れた。

学生時代から使い続けているパソコンのメールアドレスを知っている人は、家族とごく親しい友人と、元婚約者の雅洗だけだ。

メールボックスを確認すると、さつき会ったばかりの雅洗から、おやすみメールが届いていた。

——相変わらずダメだわ……

雅洗の立場を考えれば、暇なわけがない。

それでも彼は、こうやって頻繁に連絡をよこす。

再会してからの雅洗は婚約していたときよりも鈴香に気安く、そしてなんだかしつこいように感じる。

だけど、鈴香が邪険に扱っても、ひょうひょうと受け流してしまうところは昔と少しも変わらない。
変わらないからこそ、恨めしい。

変わらないということ、雅洗の目に映る自分は、いまだに幼稚で世間知らずの子供のままなのだろう。

婚約破棄を申し出たあの日から、雅洗に寄りかからなくて済むくらい、自立した大人の女性になろうと頑張っているのに。

「私、もう大人なんですけど」

思わず不満を口にした鈴香は、画面をスクロールさせ、雅洗からの古いメールを確認した。鈴香の家が没落した後も変わらず届いていた雅洗からのメールには、色々な写真が添付されている。

それらをなんとなく眺めてから、鈴香はパソコンを閉じた。



——鈴香のやつ、面白いな。